

タイの花文化 -- バンコクにあふれる花々 (フォトエッセイ)

著者	初鹿野 直美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	236
ページ	35-38
発行年	2015-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003213



■フォトエッセイ■

タイの花文化

バンコクにあふれる花々

写真・文 初鹿野直美
Naomi Hatsukano



椰子の葉でつくった金魚



ショッピングモールのイベントに登場した
巨大な鬼を花で飾り立てた

タイの首都バンコクの街は、いつも花で溢れている。この数年、クーデタやら洪水やら、必ずしも平穏とはいえない事件が続くなか、鮮やかな色の花たちが咲き誇っている様子を見ると、どこかにバンコクの日常が続いていることを確認してほっとする。神様に捧げるお供えの花、並木とともに街を彩る蘭の花、ホテルのロビーには大掛かりなフラワーアレンジメントなど、そこかしこに贅沢に花が散りばめられている。さまざまな花飾りがあるが、筆者がいちばん好きなのは、車のミラーにかけられた花飾りや屋台の調理台の隅に飾ってある花である。そこに、人々の日々のささやかな祈りを垣間見ることができるからである。

●花文化の由来

タイの伝統的な花の文化は、もともとはインドネシアのバリやカンボジアを経由して、インドからやってきたという。カンボジアでは、内戦の影響もあり、タイのように華やかな文化が育つことはなかったが、アンコール遺跡をよくよくみると、かわいらしい花のレリーフが残されている。人びとの生活のなかには、シンプルではあるが類似の花飾りの文化は息づいている。一方、タイではシンプルなものから装飾的なデザインのものまで、多種多様かつ大量の花飾りがあふれている。バンコクの花文化博物館のサクン・イスタクン氏によると、タイでは、ラーマ五世（在位一八六六〜一九一〇年）の姉が、フラワーアーティストとして積極的に花文化の振興につとめたという。その後、王室文化の発展とともに、非常に凝ったデザインの花飾りがつくられるようになった。

●タイの伝統的な花飾り

神様にお供えしたり、来客をもてなしたりするときに使う花輪（花数珠）は、プアン・マライ、もしくは単にマライと呼ばれる。結婚式の新郎新婦やムエタイのボクサーたちにもこのような花輪が渡される。祠にお供えされているのは、マリーゴールドでつくられた黄色いマライ、ジャスミンとクラウンフラワーの花でつくられた白いマライが多い。マリーゴールドは富、ジャスミンは母性、クラウンフラワーは愛の象徴である（参考文献①）。最近では、赤やピンク、紫色の花を組

み合わせたカラフルで凝ったデザインのものも多くみられる。

台座の上に花飾りを載せたものは、パン・ドクマイと呼ばれ、なかでも蓮の花のつぼみの形の飾りは、パン・プムという。仏教寺院へのお供えや国王の肖像の前に捧げられたりしている様子をみかける。最近では発泡スチロールの土台に花などを飾りつけるが、昔はバナナの幹や粘土を芯にして、台座の上に飾りつけていた。

花や花びらだけではなく、葉も多用される。バナナの葉と花とを組み合わせてバイシー（幸せを祈り糸を手首に巻く儀式）やロイークラトーン（陰暦一二月の満月の日を中心に開催される祭り）で使われる飾りをつくったり、につば椰子の葉を利用して、昆虫や魚の飾りをつくったりすることもある。

これらのタイの伝統的な花飾りは、ひたすら花を分解して、裁縫のように縫い合わせたり、重ね合わせたりといった作業を繰り返すことよってつくられる。このような手法は、花が比較的安く手に入る環境だからできるこ



花市場で結婚式用の飾りをつくる少女



エラワン廟にそなえられたマリーゴールドのマライの山



道端で通勤途中の人たちに花飾りを売る女性。夫婦で花飾りをつくりながら、1日過ごす

とである。決して長持ちするものではなく、ほんの数時間のために、敬いの気持ちを示すためにつくられた飾りである。ただし、最近では、花飾りに生花ではなくプラスチックの造花を使用したり、香りのある石鹸や布を使った花飾りなども多くみられる。

タイやカンボジアの友人たちに花飾りのことを話すと、「子どものころ、つくったことがあるわ」といわれることがある。しかし、近年では、街角のあらゆるところで露天商が花飾りを一〇〜三〇バーツ（三〇〜一〇〇円程度）で売っており、各家で手間をかけてつくるといわれるような習慣がどれくらい残っているのかは不明である。バンコクでは花飾りのつくり方を教えてくれるワークショップがいくつか開講しているが、そのようなコースをわざわざ受講するのは外国人だけだろうと思ってしまう。しかし、筆者が参加してみたところ、外国人だけではなく、花が大好きでたまらないというタイ人受講生が多くみられたことに驚かされた。また、本屋さんには、まるで手芸本のように非常に細かなデザインを紹介した本が並んでいる。日本の人が華道に動しむように、都市部の豊かになったタイの人たちにとっては、花飾りをつくることは、タイらしさを見直すひとつのきっかけなのかもしれない。

●タイの花文化を支える人たち

バンコクのチャオプラヤー川沿い、王宮にもほど近いところに、バンコク最大の花市場パーククロン市場がある。トゥクトゥク（自動三輪車）に、これ以上載せられないほどの



ジャスミンの花を量り売りする青年



花市場を盛り上げる若者たち



花市場の様子

花を積んで帰路につく人たちが多くみられる。人々はこの市場で花を買い求め、さらにアレンジを加えて、街中に並べる。店頭には花飾りを朝並べるため、市場は深夜になると、さらに活気をましていく。

花は国内外から集まってくる。国内産の花は、バンコク郊外やタイ北部でつくられていく。ミャンマー国境近くでは、ミャンマー人労働者が、花を栽培するプランテーションを支える。輸入品も多く、インド、インドネシア、中国等々のアジア各国から輸入された花だったり、遠くはアフリカからの花も市場に並ぶ。

今日では伝統的なマライに独特な色の輸入花を使ったり、ホテルやデパートを飾る近代的なアレンジに昔ながらの花飾りを足してみたり、新しい出会いがタイの花文化をさらに新しいものに変化させている。

「タイはいつでも花が咲き誇っているから、贅沢なアレンジができる」とはいっけけれど、この花を咲かせ続けるには、多くの人たちの支えと努力がある。そして、なにより、平和があつてこそ、私たちはバンコクの鮮やかな花を心穏やかに楽しむことができる。

《参考文献》

- ① Sakul Intakul and Prinya Ruenprapan. 2013. Sakul Intakul's Floral Journey Bangkok. Purple Press.



花市場の片隅の神様に供えられた花飾り《上、下》



トゥクトゥクやタクシーに飾られたマライ《左、右》



建設労働者が住むバラックの片隅に飾られていたマライ



千日紅で作られたパン・ブム。筆者がワークショップに参加した際に作成した。

はつかの なおみ /
 ジェトロ・バンコク事務所、アジア経済研究所研究員

カンボジア地域研究。カンボジアの国境地域開発、タイで働くカンボジア人労働者問題に関心をもつ